
Holy Night

翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H o l y N i g h t

【Nコード】

N O 1 4 4 M

【作者名】

翠

【あらすじ】

【快斗×蘭】クリスマスイヴの夜くらいは悲しい顔をして欲しくなくて、快斗は蘭にプレゼントを用意していた。

聖なる夜に、君は何を望む？

アイツに会えますように？

アイツと話せますように？

……いや、君なら「アイツが、聖なる夜ぐらいは平和に過ごせますように」かな。

たまたま、狙っていたビクジュエルの近くに君がいた。
だから、君の事を調べもしたし、近づきもした。

幼なじみに似ていた君に、とても優しい君に、何にでも一生懸命なところに、まっすぐな瞳に……目が離せなくなった。

小さな名探偵のおかげで、オレは出かける先々で君に会うことができたし、気になって会いに行ったこともある。

君がとても優しい顔をみせる名探偵のフリをしたりして。

あれは、鳩を助けてくれた名探偵へのお礼の気持ちもあるけれど、
なにより、君の涙を見たくなかったから。

オレが、オレに一番近い姿で、君の目の前に現れたかったから…

…。

今日はクリスマスイヴ。

街では恋人達が幸せそうに寄り添い歩き、家族がいつもより少し
豪華な食卓を囲み、子供達はサンタクロースが来るのをわくわくし
ながら眠りにつく夜。

君はいつもと同じように家族と過ごすんだろうね。いつもと違う
のは、そこにクリスマスらしいケーキやチキンがあったりするとこ
ろかな。

そして、夜は切なそうな顔をして、空を見上げてアイツの事を考
えるんだろうか。

オレは、そんな君の顔は見たくないから……。

救世主の誕生を祝う、聖なる夜くらいは……。

君には笑っててもらいたい。心からの笑顔で。

だから、これは白いサンタクロースからの、君へのプレゼント。

「しん……いち……?」

「よお、蘭」

夜。探偵事務所の屋上で、やはり君は空を見上げていた。

「どうして……」

「どうしてって、今日は何の日だよ？ クリスマスイヴくらいは、事件のこと忘れねーとな。オメーが寂しがってんじゃねーかと思って、会いに来てやったんだよ」

「私が、寂しがってると思って……?」

君は大きな黒い瞳を驚きでいっぱいにして、オレを見つめた。

不意に瞳が揺れたかと思うと、大粒の涙が頬をつたい流れ落ちる。

「ら、蘭……」

「ご、ごめ……うれしくて」

涙をぬぐい、頬をほんのりと赤く染めて微笑む君は、とてもまぶしかった。

抱きしめたくなる衝動を、オレは手を握り締めることでかろうじ

て堪える。

今のオレは、黒羽快斗じゃない。

君が求めているのも、オレじゃない。

だから、できない。

それは……アイツだけに許されたことだから。

でも、これだけは……これぐらいは、いいよな。

「バーロ、泣くんじゃねーよ」

オレはポケットの中から小さな箱を取り出すと、君に放り投げた。慌てて両手で受け取った君は、手の中にある青いリボンで飾られた小さな白い箱を、黒い大きな瞳で不思議そうに見つめた。

「これ、は……?」

「オレからの、クリスマスプレゼントだよ。いつも……待たせてっからな」

君が幸せでありますように。

いつも笑顔でありますように。

そういう願いを込めた、オレからの贈り物。

「開けても、いい？」

君は愛しむように包み込んだ両手の中の箱と、オレの顔を交互に見る。

オレはずっと微笑んでいたらしい。さらに微笑みながらうなづくと、どうぞとばかり手を差し出した。

君は緊張した面持ちでリボンに手をかけ、丁寧にラッピングをといていく。

箱を開いた君は、大きな瞳をさらに大きくして中からひとつのストラップを取り出し、見つめた。

「きれい……」

白い手につまみあげられた、濃紺の革紐ストラップの先には、一風変わったクリスタルが光っている。

「ファントムクリスタル」

「え？」

「幻影水晶っていうんだ。きれいだろ？」

「幻影……うん。それに、とても不思議……」

君は水晶の中で煌く光を不思議そうに、うれしそうに見つめていたが、オレに視線を移し、花がほころぶように微笑んだ。

「ありがとう。大切に使うね」

幸せだ。

オレは、来て良かったと思った。君の、笑顔が見れたから。

「さてと」

腕時計を確認する。

そろそろタイムアップだ。

「気に入ってくれたみたいでよかったよ。んじゃあオレはそろそろ行くわ」

「え？」

「この寒空に、あんま長い間オメーを出しておくわけにはいかねー

しな」

君の頭をポンポンとなでる。すると君は必死な顔をしてオレの服をつかんだ。

「待つて！　お願い、すぐだから。私も、プレゼントがあるの。お願い」

君はそついうと、扉の奥に消えていった。

取り残されたオレは、呆然と君が消えた扉を見つめていた。

参った。

このまま消えてしまふべきか……。

君が持ってくるモノはオレへのプレゼントじゃない。
オレがもらう資格は……ない。

でも……せつかく君の笑顔を見れたのに、黙って消えてしまったら、また泣くかもしれない。
それは、望んでいない。

どうしたら……。

迷っているうちに、階段を駆け上がってくる音が聞こえた。

もう遅い。

覚悟を決めるか。

君は、青い大きな袋を抱えて、白い息を弾ませながらオレに駆け寄ってきた。

「お待たせ」

「ん、ああ。悪いな……蘭」

「ううん。今日は来てくれて、本当にありがとう。すぐくつれしかつたんだよ?」

君は小首をかしげてオレを見上げた。

かわいいっつの！

オレが君に見惚れてぼんやりしていると、暖かいものが首を包み込んだ。

それは、青い袋から出された、白い白いマフラー。

君がかけてくれた。

とても、暖かった。

「蘭…… オメーが編んだのか？ これをオレに？」

「そう。私が編んだの。貴方のために」

ちくんと胸が痛む。

アイツのために、編まれた白いマフラー……。オレがもらってしまつて、いいのかな……。

「そういえば、言つてなかったね」

「ん？ 何を」

君はオレにかけたマフラーを結んで、ポンポンと整えると、とびきりの笑顔で微笑んだ。

「メリークリスマス！ キッド」

.....
ま
い
っ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0144m/>

Holy Night

2010年10月10日01時03分発行